

鎌倉研究における考古学の役割

第2回 鎌倉の考古学と遺跡2

古田土俊一

◇学術調査による成果 一北条義時法華堂

- ・頼朝の墓は発掘されていない。
- ・元仁元年（1224）6月13日北条義時死去。
同年6月18日「前奥州禅門葬送。以故右大将家法華堂東山上爲墳墓。」
- ・源頼朝の墓（頼朝法華堂跡）の東の丘陵には山腹に平場がある。北条義時の法華堂跡と推定。

◇発掘調査の成果（平成17年）

- ・山腹を造成した平場に、雨落ち溝を配した礎石建物跡を検出。
- ・一辺が28尺（8.4m）となる方三間（9尺-10尺-9尺）の堂宇。
- ・幅4尺（1.21m）の縁が巡り、屋根の軒出は12.4mの規模で瓦葺を想定。
- ・出土遺物は高麗青磁梅瓶、青白磁水注なども。
- ・建物の廃絶時期は13世紀末～14世紀初頭か（㉕弘安三年（1280）、㉖延慶三年（1310）を想定）。

→下向剣頭文軒平瓦（永福寺Ⅱ期相当〔1244～1248〕）が上限。かわらけは実質14・15世紀の例も出土しているが、雨落ち溝に廃棄されたかわらけ群が13世紀末～14世紀初頭の年代で、廃棄の状況が溝の機能停止を示していると判断されることから、法華堂の廃絶をこの時期とした。

→火災面は検出されず。再建の時期差は見られない（火災の痕跡が取り除かれたか）。

→義時の納骨穴も検出されず（トレンチにより中央部を確認）。→土中埋納ではない？

→全体が近世以降の畑により攪乱。

※現在、遺構は保護のため埋め戻し、発見された礎石や柱穴、雨落ち溝の跡を木杭等で表示している。さらに現地でスマホアプリをダウンロードすることで、義時法華堂の復元CGを見ることができるよう取り組みがなされている。

	年月日	事柄
①	1224.6.13	北条義時死去
②	1224.6.18	墳墓を頼朝法華堂の東山上とする
③	1224.6.19	初七日
④	1224.6.22	三浦義村による義時供養
⑤	1224.6.26	二七日
⑥	1224.7.4	三七日（本来7月3日）
⑦	1224.7.11	四七日（本来7月10日）
⑧	1224.7.16	五七日（本来7月17日）
⑨	1224.7.23	三十五日（六七日か。本来7月24日）
⑩	1224.7.30	七七日
㉔	1224.⑦. 2	名越朝時による七七日供養
⑪	1224.8.8	墳墓堂建立。新法華堂と号す
⑫	1224.8.22	百ヶ日（本来9月20日）
⑬	1224.11.18	泰時が義時の為に伽藍を建立・釈迦堂
⑭	1225.6.13	一周忌。新造の釈迦堂にて
⑮	1226.6.13	三回忌。大慈寺釈迦堂にて
⑯	1231.10.25	義時法華堂焼失
⑰	1231.10.27	法華堂の再建を協議
⑱	1231.11.18	頼朝法華堂を再建
⑲	1236.6.5	十三回忌。伊豆北条の願成就院にて
⑳	1238.12.28	時房・泰時らが義時法華堂に参詣
㉑	1240.1.24	北条時房死去
㉒	1241.12.30	泰時が義時法華堂に参詣
㉓	1248.12.13	重時・時頼が義時法華堂に参詣
㉔	1250.12.29	重時・時頼らが義時法華堂に参詣
㉕	1280.10.28	義時・時房の法華堂が焼失
㉖	1310.11.6	法華堂が焼失
㉗	1797	【近世史料】義時法華堂の場所は不明

表1 北条義時の供養行事一覧

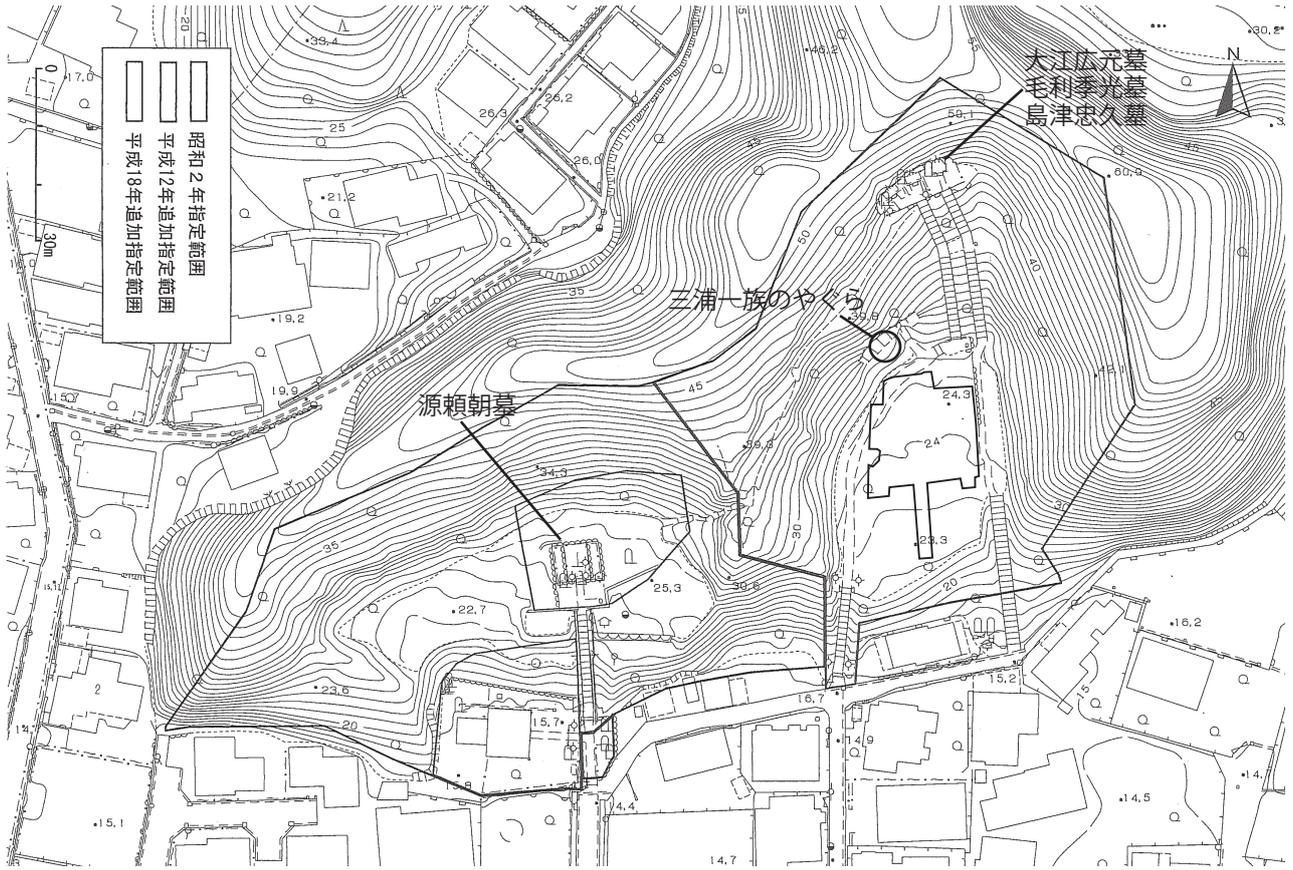


図1 法華堂跡史跡指定範囲

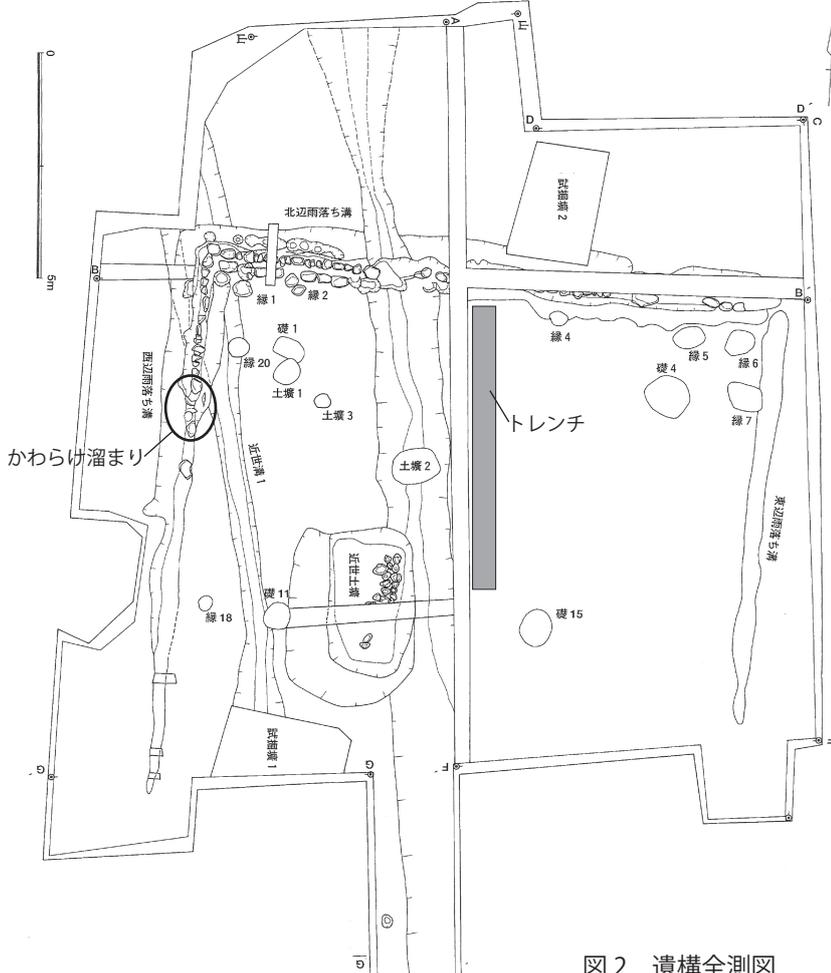


図2 遺構全測図

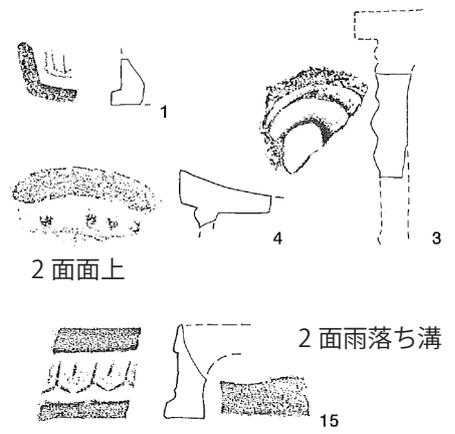


図3 出土瓦

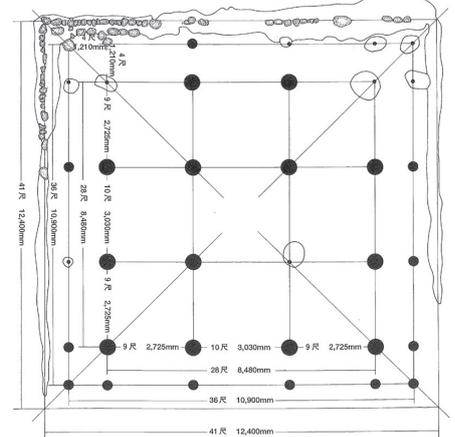


図4 堂跡柱間寸法図

◇鎌倉大仏

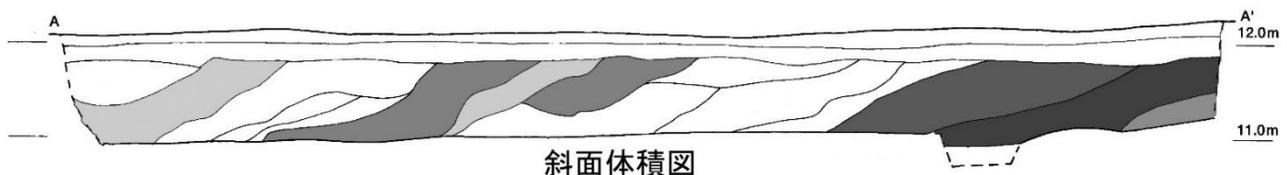
- ・浄土宗である大異山高徳院清浄泉寺の本尊は阿弥陀如来坐像（金銅製・像高 11.39m）。鎌倉時代中期の造立当初の姿を保つことから国宝。ただし史料が乏しく不明な点が多い。

謎1. 大仏はどうやってつくられたのか？

- 寛元元年(1243)に開眼供養された大仏は木造。勸進聖浄光によるもの。
- 建長4年(1252)8月17日に金銅大仏の「釈迦如来」を鑄造開始。鑄物師は丹治久友。
- 大仏の身体に残る横線7本。→7段に分けて鑄込んだ痕跡。

謎2. 大仏殿は存在したのか？

時期	大仏関連の記事
暦仁元年(1238) 3月23日	相模国深沢里大仏堂の事始め。僧浄光が勸進し、この造作を企てた（『吾妻鏡』）。
同年5月18日	相模国深沢里大仏の御頭をあげた。大きさは周八丈（『吾妻鏡』）。
仁治2年(1241)	深沢大仏殿で上棟之儀を行った（『吾妻鏡』）。
仁治3年(1242)	阿弥陀の大仏と堂の造営が3分の2まで進む。像は木造（『東関紀行』）。
寛元元年(1243)	深沢村に一字の精舎を建立し、八丈余の阿弥陀像を安じて供養した（『吾妻鏡』）。
建長4年(1252)	深沢里に金銅八丈の釈迦如来像を鑄造し始めた（『吾妻鏡』）。
建武元年(1334)	（北条時行軍）三万余騎は8月3日夜に大風が吹いて家々を吹き破っているの で大仏殿に避難したが、大仏殿の棟梁が倒れてその内にいた五百余人は一人残ら ず圧死した（『太平記』）。
応安2年(1369)	大風により鎌倉大仏殿が倒壊した（『鎌倉大日記』）。
文明18年(1486)	鎌倉大仏は露座であった（『梅花无尽蔵』）。
明応7年(1498)	由比ヶ浜の海水が大仏殿まで上がった（『長帳続年日記』）。
慶長15年(1610)	堂は失われているが、七間四方の大きな礎石が残されている（『義演准后日記』）。



◇発掘調査の成果（平成12年度と13年度）

- ・最下層の地盤は平坦面を造成している。大仏造立時に岩盤の掘削や低い部分の埋め立てを行った。
- ・調査にて大仏に向かって延びる斜面堆積の痕跡を検出。
 - 周囲を土砂で埋めながら盛土を重ねて1段ずつ鑄込んだ痕跡か。
- ・盛土から鋳滓・溶けた銅片・鞆の羽口が出土。銅片の成分分析から大仏の銅の成分とほぼ一致。
 - 調査により判明した上記2点から、大仏はこの場所で造られたことがほぼ確実となった。
- ・大仏鑄造後には大仏を掘り出し、大仏殿を建てる平坦な地面に再び整地し直した。
- ・斜面堆積の地盤を掘削した根固め跡を10ヶ所で確認。泥岩と砂利を交互に叩き詰めた版築工法。
- 大仏殿礎石の土台。→大仏殿礎石の位置が推測できるように。仏殿の正面の幅は約44m。側面の長さは約42.5m。瓦が出土しないことから桧皮葺き柿葺きであったか。規模は七間四方で合計60個の礎石

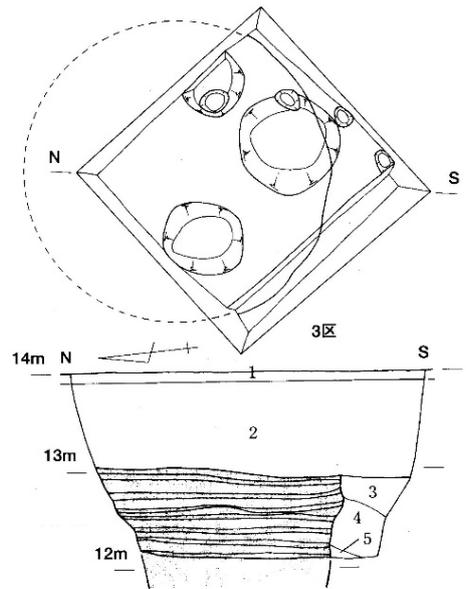
が必要。→境内のベンチのような大石は礎石か？53基+転用礎石3基=56基確認。

→大仏殿に必要な礎石がおおよそ現存していることが判明。

- ・ほかに、海水産の珪藻の有無など調査では津波の痕跡は見つからず。
- ・銅に含まれる鉛の同位体分析によると使われた銅の産地は蛍光X線分析および鉛同位体比分析の結果、中国華南産のものと判明。→中国の宋銭を使用したとみられる。

◇第1・2回のまとめ

- ・縄文・弥生だけではなく、文献史料が多く残る時代であっても考古学の果たす役割は大きい。
- ・鎌倉市内で見かける発掘現場からは日々多くの成果があがっているが、多くの制約によって特に源頼朝の時代の様相は分っていないことが多い。
- ・そのような中でも、永福寺や北条義時法華堂など鎌倉初期を代表する寺院が全面発掘され、全容が明らかとなり、保存活用の取り組みが為されている。
- ・現存する寺院の発掘はさらに制約が多いが、文献史料だけでは知ることのできなかった当時の様相をより鮮明に描き出す手がかりとなる。



根固め遺構図

参考文献

監修文化庁文化財部記念物課 2016『定本 発掘調査のてびき』同成社

鎌倉市教育委員会 2002『国指定史跡永福寺跡』

建長寺境内遺跡発掘調査団 1986『建長寺境内遺跡発掘調査報告書』

鶴岡大学史跡建長寺境内発掘調査団 2003『史蹟建長寺境内 得月楼(客殿)建設に伴う発掘調査報告書』

鶴岡八幡宮 1983『鶴岡八幡宮境内 直会殿用地発掘調査報告書・研修道場用地発掘調査報告書』

鶴岡八幡宮境内発掘調査団 1985『鶴岡八幡宮境内発掘調査報告書』鎌倉市教育委員会

河野眞知郎 1995『中世都市鎌倉：遺跡が語る武士の都』講談社

朝日新聞社 2000『朝日百科 日本の国宝別冊 国宝と歴史の旅7 鎌倉と宋風の仏像』

鎌倉市教育委員会 2002『鎌倉大仏周辺発掘調査報告書』

福田誠 2004「大仏造立の痕跡を探る」『鎌倉』第94号 鎌倉文化研究会

鎌倉市教育委員会 2005『北条義時法華堂跡』